

「青年期における対人不安意識の発達的变化(続報)」

堀 井 俊 章

保健管理センター

(平成13年9月10日受理)

要 旨

本研究は青年期における対人不安意識の発達的变化に関する調査研究(続報)である。中学生363名,高校生347名,大学生419名,計1,129名を対象に対人不安意識を測定する「対人関係質問票」を実施した。因子分析(主因子法)によって抽出された6因子の因子得点を用い,発達的变化の量的分析を行った結果,対人不安意識は全般的に中学から高校にかけて上昇していた。高校から大学にかけては,〈自分や他人が気になる〉悩み,〈目が気になる〉悩み,〈自分を統制できない〉悩みが下降し,反対に〈集団に溶け込めない〉悩みが上昇していた。対人不安意識は全般的には自意識の高まる高校生の年代に強く自覚されやすいことが示唆された。しかし,大学生では,集団にとけ込めるかどうかが生徒生活において死活問題となる傾向にあり,集団交際恐ろ的な心性が高まりやすいことが示唆された。

1 問 題

青年期における心理臨床の現場では,「人にどのように思われるのか気になる」「視線が怖い」「人前で緊張する」「集団にとけ込めない」といった対人恐ろ的な訴えをよく耳にする。対人恐怖心性,すなわち対人不安意識は心理臨床の現場だけではなく,広く青年一般が自覚しやすい悩みでもある。

堀井・小川(1997a)はこのような対人不安意識を数量的に測定する「対人関係質問票」(林・小川,1981)の因子分析を行い,表1のような6つの因子群(因子負荷量50以上の項目をまとめたもの)を得た。因子1〈自分や他人が気になる〉悩みは,対人関係において自分のことを評価する他者への過剰な意識や評価される自己への過剰な意識,すなわち,他意識や自意識の過剰性に基づく不安意識を表す。因子2〈集団に溶け込めない〉悩みは,集団に対する違和感や不適合感があり,集団という対人場面に溶け込んで自由にかつ適切にふるまえないというような,いわば集団交際恐ろ的な悩みを表す。因子3〈社会的場面で当惑する〉悩みは,シャイであることによって生起する社会的場面での不安意識を表す。因子4〈自分を統制できない〉悩みは,自らの意思や感情を統制できないことに対する不満足感や問題意識を表している。因子5〈目が気になる〉悩みは,目にまつわる

視線恐怖的な不安意識を表す。因子6 <生きることに疲れる> 悩みは、生への充実感が持てず、抑うつ的になり、心身の不調を感じるというような不安意識を表す。この因子6と因子4は対人意識へのとらわれのなかで随伴しやすい自己に対する否定的自己意識を表す。

堀井ら(1995⁹⁾、1997 a⁷⁾)はこのような青年期における対人不安意識の発達の変化について数量的検討を行った。そこでは項目ごとの量的分析と因子構造に基づく質的分析が中心であり、上述した因子分析の結果得られた6因子の量的発達差の分析は行われていなかった。また、性差の検討も不十分であった。因子による量的発達差や性差の検討は青年期における対人不安意識の形成過程や要因を解明する上でも重要な手がかりとなる。そこで本研究では、中学生、高校生、大学生を対象に、対人不安意識の因子ごとの量的発達差と、併せて性差の検討を行うことを目的とする。

表1 対人関係質問票の因子群

負荷量	負荷量
因子1 <自分や他人が気になる> 悩み	因子3 <社会的場面で当惑する> 悩み
32) 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる 85	62) 引っ込み思案である 67
8) 職場、学校のクラス、近所の人に自分がどのように思われているのが気になる 79	34) 人前に出るとオドオドしてしまう 65
38) 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう 77	50) 気が弱い 65
13) 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする 66	56) 内気である 63
60) 相手にイヤな感じを与えるような気がして、相手の顔色をうかがってしまう 59	44) 小心である 62
14) 人と会うときに自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えるのではないかと不安になることがある 58	28) 会議などの発言が困難である 60
26) 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう 56	10) 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない 60
20) 人と会うとき、自分の顔つきが気になる 54	因子4 <自分を統制できない> 悩み
36) つまらないことをクヨクヨ考える 53	41) ひとつのことに集中できない 77
因子2 <集団に溶け込めない> 悩み	35) 何をやるにも集中できない 75
3) 集団のなかに溶け込めない 83	5) 根気がなく、何事も長続きしない 73
9) グループでのつき合いが苦手である 81	11) ものごとに熱中できない 59
39) 仲間のなかに溶け込めない 73	17) 計画を立てても実行が伴わない 56
33) 多人数の雰囲気になかなか溶け込めない 73	23) 意志が弱い 50
15) 人との交際が苦手である 69	因子5 <目が気になる> 悩み
27) 対人関係がぎこちない 61	59) 人と目を合わせていられない 69
43) 人と自然につき合えない 59	47) 人の目を見るのがとてもつらい 63
21) 人が大勢いると、うまく会話のなかに入っていけない 59	65) 人と話をするとき、目をどこにもつていっていいかわからない 60
	53) 顔をジューッと見られるのがつらい 53
	因子6 <生きることに疲れる> 悩み
	51) 生きていることに価値を見いだせない 64
	57) 充実して生きている感じがしない 62
	52) いつも疲れているような感じがする 54
	46) いつも頭が重い 52

2 方 法

(1) 調査対象

東京都およびその近郊の中学校3校(公立2校,私立1校)の生徒363名(男子157名:平均年齢13.6歳 SD 0.97,女子206名:平均年齢13.4歳 SD 1.06),高校4校(公立3校,私立1校)の生徒347名(男子124名:平均年齢16.6歳 SD 1.01,女子223名:平均年齢16.4歳 SD 0.80),大学4校(国公立2校,私立2校)の学生419名(男子207名:平均年齢19.3歳 SD 1.15,女子212名:平均年齢19.4歳 SD 1.17),合計1,129名。

(2) 調査時期

1991年12月から1993年7月

(3) 質問紙

林・小川(1981⁵⁾)の作成した対人関係質問票を使用した。(なお,本論文執筆時には,対人関係質問票の改訂版である「対人恐怖心性尺度(堀井・小川,1996⁶⁾,1997b⁸⁾)が作成されている。参考に資料として掲載した。)

(4) 手続き

被調査者に対人関係質問票を集団場面で配布し,回答を求めた。

3 結 果

対人関係質問票の因子分析(主因子法)によって得られた個々人の因子得点を利用して,二要因(性×年代)の分散分析を試みた。年代の要因に主効果が認められた場合は,多重比較(Newman-keulsの検定)を行った。表2に,各因子ごとの性別と年代別の平均値と標準偏差,および分散分析の結果を示した。また,因子得点の平均値を年代ごとにプロットしたものを図に示した。

表2 因子得点の平均値と標準偏差および二要因(性×年代)の分散分析の結果

	中学 ^{a)}	高校 ^{b)}	大学 ^{c)}	性差	発達差	交互作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	
因子1 <自分や他人が気になる> 悩み	-0.156 (1.067)	0.061 (0.923)	-0.136 (0.960)	6.34*	3.19*	男<女 大<高
因子2 <集団に溶け込めない> 悩み	-0.118 (1.011)	0.079 (0.921)	0.141 (1.001)	1.27	7.58***	中,高<大
因子3 <社会的場面で当惑する> 悩み	-0.133 (0.999)	0.144 (0.996)	0.169 (0.977)	3.78	6.27**	中<高,大
因子4 <自分を統制できない> 悩み	0.102 (1.020)	0.108 (0.910)	-0.194 (0.976)	0.02	7.12***	大<中,高

	中学 ^{a)}	高校 ^{b)}	大学 ^{c)}	性差	発達差	交互作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	
因子5	0.171 (1.042)	0.180 (0.840)	-0.073 (0.879)	6.82**	10.69***	0.27
<目が気になる>悩み	0.083 (0.961)	-0.007 (0.887)	-0.234 (0.877)			
因子6	0.057 (1.033)	0.064 (0.887)	-0.013 (0.906)	1.20	2.47	0.98
<生きることに疲れる>悩み	-0.082 (0.949)	0.116 (0.878)	-0.109 (0.892)			

注：平均値と標準偏差は、上段が男子、下段が女子
^{a)}男子：n=157, 女子：n=206 ^{b)}男子：n=124, 女子：n=223 ^{c)}男子：n=207, 女子：n=212
 p<.001, *p<.01, *p<.05

表2をみてわかるように、六つの因子の内、五つの因子において年代要因に有意な主効果が認められ、二つの因子において性の要因に有意な主効果が認められた。交互作用については、いずれの因子においても有意ではなかった。各因子ごとにみると、因子1<自分や他人が気になる>悩みは、年代と性の要因に有意な主効果が認められ、高校生の得点が大学生に比べて有意に高く、女子の得点が男子に比べて有意に高かった。因子2<集団に溶け込めない>悩みは、年代の要因に有意な主効果が認められ、大学生の得点が中学生と高校生に比べて有意に高かった。因子3<社会的場面で当惑する>悩みは、年代の要因に有意な主効果が認められ、高校生と大学生の得点が中学生に比べて有意に高かった。因子4<自分を統制できない>悩みは、年代の要因に有意な主効果が認められ、中学生と高校生の得点が大学生に比べて有意に高かった。因子5<目が気になる>悩みは、年代と性の要因に有意な主効果が認められ、中学生と高校生の得点が大学生に比べて有意に高く、男子の得点が女子に比べて有意に高かった。因子6<生きることに疲れる>悩みは、年代と性の要因ともに有意な主効果が認められなかった。

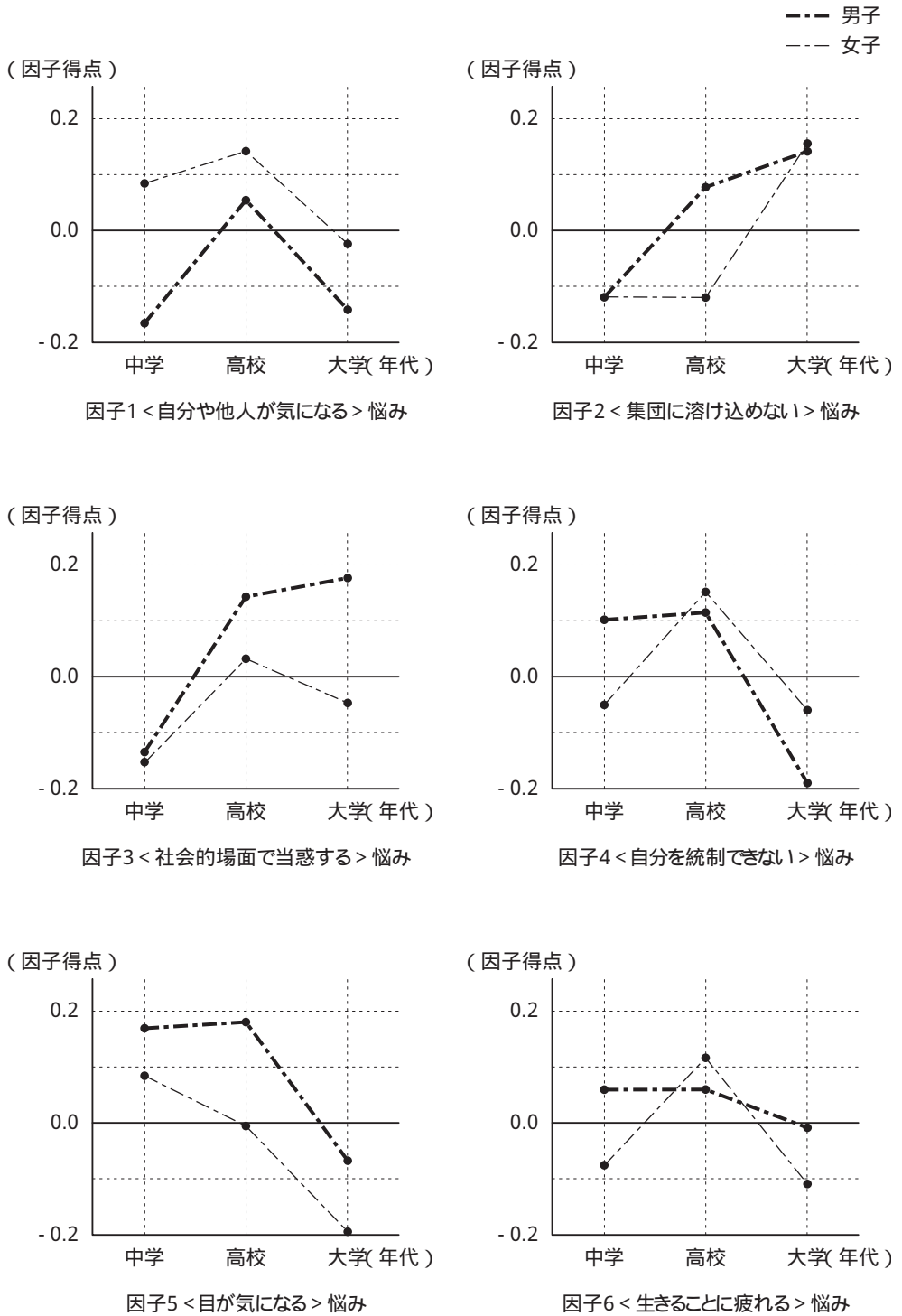


図 対人不安意識の発達の变化

4 考 察

(1) 対人不安意識の発達の变化

中学から高校にかけて

全体的には、高校生の得点が中学生の得点より高めであることから、中学から高校にかけて対人不安意識は上昇する傾向にあると考えられる。堀井(1995)⁷⁾は大学生377名を対象に、回想法による対人不安意識の調査を行った結果、中学から高校にかけて対人不安意識が全般的に高まり、高校生の対人不安意識が他の年齢層に比べて最も高いことを見いだしている。中学から高校へという年代の上昇は、対人不安意識の高まりと密接な関連を持つことが示唆された。

また、対人不安意識の中でも特に因子3 <社会的場面で当惑する>悩みは中学から高校にかけて有意に高まった。これは高校生になると社会的場面でのパフォーマンスの際に生じるような臨場的な不安やシャイな心性が強まることを表している。

このような実態の背景について以下の三つの視点から考察を試みる。

1) 性的衝動

小学生高学年から中学生にかけては第二性徴が始まり、急激な身体変化と性的衝動が生じるようになる。このような思春期においては「自分の中で何が起きているのか」(西園, 1977)⁸⁾と戸惑うことになり、性的衝動を明確に意識することがかなり困難となる。その世代においては「性的関心をからだで感じることについての不安」(西園, 1983b)²⁾というような漠然たる身体感覚としての不安体験になりやすい。しかし、高校生になり、自我意識の成長に伴い、性的衝動をある程度意識化できるようになると、性にまつわる自意識が他者に知られることへの不安として体験されるようになる(西園, 1983b)²⁾。これは対人場面における羞恥の体験にもつながるものである。つまり、高校生になると、性的衝動の意識化に基づく羞恥の自覚が、<社会的場面で当惑する>悩みを強めたと考えられるのである。

しかし、必ずしも性的衝動だけが問題になるとは限らない。自己をより客観化できるようになった高校生においては、さまざまな感情が生じ始める。嫉妬、敵意、排他、不信、優越など、倫理に反するような欲望が個人の内面でもわかろうとめき始める。それらは自己の意識の中で適度に統制できず、他人にあからさまにすることがはばかれるものである。したがって社会的場面において、自己と他者を精神的に害することなく、社会化された形でどの程度まで自らの欲望を表現してよいのか戸惑い、恥ずかしがるのがこの世代の一つの特徴であると思われる。

2) 親からの心理的離乳

思春期においては自他のあいだに新しい関係の構築が必要とされる中で、新たな「他者」の出現が起こり、他者のまなざしを意識し始めるようになる(村瀬, 1983)⁹⁾。このような現象の背後には親からの心理的離乳の問題がある。

児童期においては、対社会との関係において不安が生じて、親の庇護のもとに戻れば心理的安定が得られていた。しかし、思春期になると親から心理的に離脱を試み、高校生ではそれが中心的な課題となる(津留, 1981)³⁾。まさに大橋(1988)⁵⁾のいう「馴染んだ

ウチから見知らぬソトへと生活空間を拡大せねばならぬ」時期を迎える。仲間をはじめ社会との新たな関係を築くにあたり、その状況を恐れ尻込みする事態が生じても、一旦親から離脱を試みようとした以上、再度親に依存することには躊躇がある。そのため親のもとにも社会のもとにも自らを依拠しないように、自己内に引きこもるような態度をとることもある。しかし、一人では生きていけないことを暗黙の内に知るようになり、新たな居場所としての社会が大きな位置を占めるようになる。その結果、どのような自分であれば社会に受け入れられるのか、社会に受け入れられるような態度や姿とはいかなるものなのか、と社会に対する自らのふるまいに敏感にならざるをえなくなる。それが社会的場面における緊張や困惑につながるのではないだろうか。

3) 劣等感

高校生は自らの身体、容貌、能力、性格などの劣等感を持ちやすい年代といわれている（加藤，1977¹¹⁾；津留，1981³¹⁾）。それは自己をある程度客体視できるようになり、自己と他者との差異が意識されやすいために生じるものである。また、自らに対しても高い要求水準を掲げるため、現実の自己像と理想的自己像とのギャップが大きくなるために生じるものでもある（滝沢，1994³⁰⁾；宮下，1996¹⁶⁾）。

高校生は、社会的場面において劣等感を生じさせている自己の否定的側面や劣等感を持つこと自体が人に晒されたり、露呈したりしてしまうことに不安を持ちやすくなる。そのため社会的場面で当惑するものと考えられる。

なお、対人恐怖症は、青年期において頻発しやすいことが知られているが、特に高校生における発症が多い。実際に、15歳から19歳までの発症は、山下（1977）³⁶⁾の調査では患者全体の44.0%、近藤（1980）²⁾の調査では40.4%、鈴木（1985）³⁷⁾の調査では50.0%となり、いずれも高校生を中心とした青年期中期の発症が他の年齢層の発症に比べて最も高い割合を占めている。したがって、対人不安意識が中学生から高校生にかけて強まることと、高校生における対人恐怖症の発症のしやすさは密接な関連にあると考えられる。

高校から大学にかけて

高校から大学にかけては、対人不安意識の因子得点が有意に下降するものが三つあり、逆に上昇する因子が一つあった。そこで対人不安意識の発達傾向をさらに二つに分類して考察を行う。

1) 高校から大学にかけて下降する因子

高校から大学にかけて有意に得点が下降する因子は、因子1〈自分や他人が気になる〉悩み、因子4〈自分を統制できない〉悩み、因子5〈目が気になる〉悩みであった。高校から大学にかけては過剰な自意識や他意識、さらには視線恐怖心性が減弱し、自己統制感が回復する傾向にあることがわかる。阿部（1985）³⁾の研究によると、健常者の視線恐怖の訴えは15歳前後でピークに達することが報告されている。今回の因子5〈目が気になる〉悩みの結果と符合する。

次に三つの因子の得点が高校から大学にかけて下降した背景について考察する。

a) 身体変化の受容

思春期に入り急激な身体変化が生じ、性衝動や攻撃衝動が高まっていたが、大学生ぐらゐの年齢になると身体変化が安定に向かい、性衝動や攻撃衝動の受容が促進される。視線恐怖が攻撃性を内包している（内沼，1977³²⁾；西園，1983 a²¹⁾）ことを踏まえると、大学

生では、攻撃衝動の受容が攻撃性を内包する因子5 <目が気になる> 悩みの下降につながり、身体変化の受容が身体への劣等感と関連する因子1 <自分や他人が気になる> 悩みの下降を引き起こすと考えられる。また、大学生は身体的変化の安定と衝動性の受容によって自己の内面的な精神エネルギーの調節が適切になり、精神機能へのとらわれから解放される様相もあり、それが因子4 <自分を統制できない> 悩みの下降に影響を与えていると思われる。

b) 周囲の圧力からの解放

現代は高校や大学への進学率が高まり、それに伴い受験競争の激化が生じている。大学生になると、受験競争からの解放は文字通り競争心からの解放を引き起こす。視線恐怖は攻撃性の表出としての意味を担うことから、視線恐怖的な心性を表す因子5 <目が気になる> 悩みは、受験の中心世代である中学生や高校生において蓄積された競争心の収まりや調節によって同時に下降すると思われる。

また、大学生では、受験競争や偏差値教育からの解放により、他者との相対的な比較へのとらわれが弱まり、他者からの評価によって自らを位置づけることも少なくなる。したがって他者からの評価への過敏さを表す因子1 <自分や他人が気になる> 悩みも下降するのであろう。

宮下・小林(1981)⁷⁾は、青年について「成長とともに、次第に社会や周囲からの圧力から解放され、自由な雰囲気と自己充足感を獲得するようになる」と述べている。大学生は、学校や親からの管理・束縛・圧力から解放されることによって、本来の自由さを取り戻すようになり、自己の統制感も回復するのであろう。その結果、因子4 <自分を統制できない> 悩みは下降することになると考えられる。

2) 高校から大学にかけて上昇する因子

高校から大学にかけて有意に得点が増える因子は、因子2 <集団に溶け込めない> 悩みである。この因子得点だけが大学生になると特に高まることから、大学生の対人不安意識の一つの特徴を表している。

a) 学校における集団生活の変化

中学生と高校生は大学生と比べると、学校生活の環境がかなり異なり、学校のクラス集団における活動が中心となりやすい。クラス集団は担任教師の管理のもとに強い凝集性を備えているので、自らの集団への位置づけや所属意識が保たれやすい傾向にある。しかし、大学生になると、クラスという凝集性は一般に弱まり、集団社会への位置づけや所属意識が稀薄になり孤独に陥りやすい。そのため岡田(1988)⁸⁾が指摘するように、大学生は身近な集団に受容されることに対して強迫的な努力と気遣いを行うことが多くなる。集団への位置づけを確保し、心理的安定を計るためにはサークル、アルバイト仲間、ボランティアグループなどのさまざまな集団社会の中から、自らにふさわしいものを主体的に選択し、その社会の一員となるべき積極的な態度が要請される。すなわち <集団に溶け込めない> 悩みは、大学生の集団社会への位置づけの確保という課題のなかで生じやすい葛藤であると思われる。

b) ソーシャル・スキルの要請

児童期の家庭環境を中心とした生活のなかで形成された対人関係様式は思春期に入り、親からの分離独立を経て、新たな社会とかわりを持つ中では通用しなくなる。すなわち、

家庭から仲間、そして社会へとソーシャルなかわりが拡大する中で、新たな対人関係のスキルを自ら獲得することが要請される。特に社会への参入が準備課題となる大学生は、高校生以上に社会と適切かつ円滑にかかわる術が要請されるようになる。したがって、社交性やソーシャル・スキルの欠如に関する悩みでもある〈集団に溶け込めない〉悩みは、大学生においてさらに高まりやすくなるのであろう。

c) ふれ合い恐怖

山田(1989)³⁴⁾は現代青年が浅い付き合いは上手にこなしても深い付き合いには困難をきたす者が多いことを指摘している。松井(1990)³⁵⁾も現代青年の特徴として、友人との全人的な融合を避け、心理的距離を大きくとろうとする傾向を指摘している。山田(1989)³⁴⁾は対人関係が深まるような場面になると困難を感じる症状をふれ合い恐怖と名付けた。〈集団に溶け込めない〉悩みは、ふれ合い恐怖的な心性と密接な関連にあると思われる。すなわち、〈集団に溶け込めない〉悩みは、仲間やグループとのかかわりにおいて、形式的・表面的・機械的な関係では困難を感じないが、顔見知りの間柄から、溶け込むというような情緒のかつ親密な関係に発展する場面では困難を感じるような心性としての意味を持つと思われる。実際にふれ合い恐怖の者が対人関係において親密さを深めたくない理由として、自分から仲間に溶け込めないことが挙げられている(山田ら, 1987)³⁵⁾。

視線恐怖は中学生や高校生において発症しやすいのに対し、ふれ合い恐怖は大学生において発症しやすいことが指摘されている(山田ら, 1987³⁵⁾; 山田, 1989³⁴⁾)。また、岡田(1993)³⁴⁾によると、大学生のふれ合い恐怖は他者の視線が必然的に気になるのではなく、他者の視線からあらかじめ退却した所で安定している。本結果においても、〈目が気になる〉悩みは大学生において低くなったが、反対にふれ合い恐怖と密接な関連を持つ〈集団に溶け込めない〉悩みは高まっていたことと符合する。

以上、三つの視点から対人不安意識の発達の变化の背景について考察を行ってきた。それぞれの視点は独立なものではなく、それぞれが絡み合いながら個人に作用していると考えられる。また、他の心理的・社会的・生物的要因などが関与していることもありうるだろう。なお、今回の調査では、対象が中学生から大学生までであったので、大学生以降の対人不安意識の実態は不明である。しかし、他の資料と関連づけながら大学生以降の対人不安意識について補足的考察を行う。

阿部(1985)³⁶⁾は一般人の視線恐怖的傾向が15歳前後でピークに達し、その後老年期に至るまで概ね下降の一途を辿ることを報告している。このことから視線恐怖心性を表す因子5〈目が気になる〉悩みは大学生以降も下降していくことが予測される。

また、対人恐怖症は青年期に多く、それ以降はほとんど生じない病態であるといわれている。実際に高橋(1976)³⁹⁾の調査によると、発症年齢は13歳から18歳までの時期に集中し、近藤(1980)³²⁾の調査においても、14歳前後から発症し、19歳までに好発するとされている。30歳以上の発現は鈴木(1985)³⁷⁾の調査によると、わずか3.4%である。また、山下(1977)³⁶⁾は、対人恐怖について、「まず青年期の病であり、それは本来、人生経験を積み、他者のなかで自己を確立するにつれて、自然治癒に向かうべき仮の病態である」と述べている。このような報告や指摘を考慮にいと、対人不安意識においても、大学生以降は全般的に下降していくことが予測される。なお、堀井(1995)³⁸⁾は、大学生377名を対象に大学生以降(30歳・45歳・60歳)の自己の対人不安意識の程度を予想させたところ、

対人不安意識が全般的に下降していくことが確認された。つまり、青年自身も対人不安意識が青年期以降に弱まることを自覚しているのである。

ところが、阿部(1985)⁹⁾は一般人の対話恐怖傾向については青年期以降も持続することを明らかにしている。このことを踏まえると、対話恐怖に関連すると思われる社会的場面で当惑する<悩みが青年期以降も持続される可能性を持つ。これはスピーチなどのパフォーマンス行動は実社会の緊張感のある現実場面において常に要請され続けるために、不安が持続されるものと推測される。

(2) 対人不安意識の性差

本研究において、因子5<目が気になる>悩みで男子の方が女子より有意に得点が高かった。しかし、因子1<自分や他人が気になる>悩みでは、反対に女子が男子より有意に得点が高かった。すなわち男子は目にまつわる視線恐怖心性が女子より強く、一方、女子は他者からの評価に対する不安意識など、自他へのとらわれ的な心性を男子より強く持つことが示唆された。

男子

西園(1983a)⁷⁾は、視線恐怖が他者との関係性の中で攻撃が鋭化していくものであることを指摘し、内沼(1977)³²⁾も視線恐怖には相互破壊性という本質がその基底にあるといったことを指摘している。すなわち、視線恐怖には攻撃性が内在しているものと考えられる。生物学的に、男子は種内闘争に駆り立てられやすい傾向が遺伝的に組み込まれ(倉光, 1993)³⁾、心理社会的にも、男子は女子より競争意識が強く(鈴木, 1991)²⁸⁾、他者を対立的、競争的にとらえる傾向にある(倉光, 1993)³⁾。つまり、男子においては攻撃性が強く、その特性が攻撃性を内包する視線恐怖心性の強さと密接な関連にあると考えられる。また、時代的推移を考慮に入れると、近年、視線恐怖心性は女子よりも男子において増大する傾向にある(堀井・小川, 1995)⁵⁾。近年の競争社会における敵を想定する攻撃的心性は男子の視線恐怖の増大という面に反映されていると思われる。

女子

女子は従順で受け身的な役割をとることが社会的に期待されている(伊藤, 1978¹⁰⁾; 東, 1979³⁾)。このような性役割のもとでは、女子は他者に受け入れられるかどうかが一つの心理社会的な課題となりやすい。また、女子は公的自己意識、すなわち容貌や言動などの他者から見られる自己に対する意識が男子より強く(菅原ら, 1986)⁶⁾、公的自己意識の高まりは、他者からの評価懸念を引き起こしやすい(Leary, 1983)⁴⁾。つまり、女子は他者に自らが受け入れられるかどうかといったことや、他者からどのように見られ、評価されるかといったことに過敏になりやすい特性を持つ。したがって、このような特性と関連のある<自分や他人が気になる>悩みは女子に強まる傾向にあるものと考えられる。

時代的な観点からは、対人恐怖症者の場合、「かつては圧倒的に男性に多く認められたが、いまではこの面でも男女平等に近づきつつあるというのが、日本の精神科医の一致した見解である(内沼, 1990)³³⁾といわれ、鍋田(1994)³⁹⁾は女性の症例が急増し、自らの治療ケースは女子が7割に達していることを報告している。このような結果は近年における女性の社会進出により、対人関係における軋轢の経験が増大したことに起因すると思われる。また、学校場面においても女子は対人関係の上で男子と同等に扱われ、今まで以上に

自主性と独立性が要求されるようになり、それが負担となり、結果として対人葛藤が増大するようになった面もあると思われる。さらには、配慮的であれという従来の性役割と実社会において要請される自己主張との葛藤により、対人恐ろしい傾向が強まったとも考えられる。いずれにせよ、女子の評価への懸念、すなわち〈自分や他人が気になる〉悩みは、現代社会における対人葛藤の増大と性役割にまつわる精神的葛藤が相俟った状態で強化されていると推測される。

このように今日の対人不安意識は、男子では攻撃性が深くかかわる視線恐ろしい不安として表出されやすく、女子では他者から評価される不安という観念的・受動的な主題において表出されやすいという特徴を有すると考えられる。西園(1983a)³⁾は、青年の対人恐怖について、男子は外界を自己と対峙したものとしてとらえるようなところがあり、それがおそれの心理として理解されるのに比べ、女子ではいかに外界に受け入れられるかといった問題が生じ、それが恥の心理で理解されることを指摘している。これはまさしく前者が〈目が気になる〉悩みと、後者が〈自分や他人が気になる〉悩みと対応しているように思われる。しかし、対人不安意識の性差の明確な原因については依然として不明な点も多く、今後は性役割や生物学的起源など、性の特性の理解を更に深める中で検討を進めていく必要がある。

以上の結果、対人不安意識は〈社会的場面で当惑する〉悩みを中心に、総じて中学から高校にかけて上昇し、高校から大学にかけては、〈自分や他人が気になる〉悩み、〈目が気になる〉悩み、〈自分を統制できない〉悩みが下降し、反対に〈集団に溶け込めない〉悩みが上昇していた。また、〈自分や他人が気になる〉悩みは女子が強く、〈目が気になる〉悩みは男子が強いことが見出された。

今回の分析については、18歳から22歳にあたる年代のサンプルを大学生とした。しかし、この年代には専門学校生、社会人など、大学に進学しない層も含まれる。今後はこのような層も対象に含めて発達上の比較を再検討する必要があるだろう。また、今回の分析法については横断的方法によるものだが、発達の变化についてさらに厳密な分析法を採用するならば、同じ年代に生まれ、特定の時代経験を共有する同世代集団(コホート)の複数を対象に対人関係質問票を実施し、縦断的に何回か同じ質問票を実施する必要がある。それぞれの結果を相互に比較対照し、共通する普遍的変化と、あるコホートに特有な偶然的変化とを判別することによって、対人不安意識の強弱を規定する時代的要因を考慮に入れた発達の变化がさらに明確になるであろう。

文 献

- 1) 阿部和彦 (1985) : 発達の見点からみた対人恐怖症 - 小児期および青年期における発達と対人恐怖的症状 . 高橋徹編, 精神科 Mook No .12 対人恐怖症 . 金原出版, 70 - 75 .
- 2) 東 清和 (1979) : 性差の社会心理 . 大日本図書 .
- 3) 林 洋一・小川捷之 (1981) : 対人不安意識尺度構成の試み . 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29 - 46 .
- 4) 堀井俊章 (1995) : 青年期における対人恐怖の心性 - 心的時間軸による理解 - . 日本性格心理学会第4回大会発表論文集, 66 - 67 .
- 5) 堀井俊章・小川捷之 (1995) : 思春期・青年期における対人不安意識の時代的推移 . 上智大学心理学年報, 19, 75 - 84 .
- 6) 堀井俊章・小川捷之 (1996) : 対人恐怖心性尺度の作成 . 上智大学心理学年報, 20, 55 - 65 .
- 7) 堀井俊章・小川捷之 (1997 a) : 青年期における対人不安意識の発達の变化 . 心理臨床学研究, 14, 448 - 455 .
- 8) 堀井俊章・小川捷之 (1997 b) : 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) . 上智大学心理学年報, 21, 43 - 51 .
- 9) 堀井俊章・卯月研次・小川捷之 (1995) : 青年期の対人不安意識に関する研究 . 心理臨床学研究, 13, 215 - 221 .
- 10) 伊藤裕子 (1978) : 性役割の評価に関する研究, 教育心理学研究, 26, 1 - 11 .
- 11) 加藤隆勝 (1977) : 青年期における自己意識の構造 . 心理学モノグラフ14 東京大学出版会 .
- 12) 近藤喬一 (1980) : 対人恐怖の時代的変遷 - 統計的観察 - . 臨床精神医学, 9, 45 - 53 .
- 13) 倉光 修 (1993) : 現代青年の自己意識と対人関係 - 三つの卒業論文が示唆すること - . 梶田叡一編, 現代のエスプリ, 307, 103 - 113 .
- 14) Leary, M. R. (1983) : *Understanding social anxiety*. Beverly Hills, California : Sage. (レアリー M. R. 生和秀和 (監訳) 1990) : 対人不安 . 北大路書房 .)
- 15) 松井 豊 (1990) : 友人関係の機能 . 斉藤耕二ほか編, 社会化の心理学ハンドブック . 川島書店, 283 - 296 .
- 16) 宮下一博 (1996) : 人間関係の発達と対人的感情 . 斉藤誠一編, 人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係 . 培風館, 109 - 133 .
- 17) 宮下一博・小林利宣 (1981) : 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 . 教育心理学研究, 29, 297 - 305 .
- 18) 村瀬孝雄 (1983) : 思春期の諸相 . 飯田 真ほか編, 岩波講座 精神の科学6 ライフサイクル . 岩波書店, 141 - 180 .
- 19) 鍋田恭孝 (1994) : 日本の思春期混乱の意味するもの - 対人恐怖症の臨床と自己意識という視点から - . 思春期青年期精神医学, 4, 78 - 83 .
- 20) 西園昌久 (1977) : 対人関係論 . 精神医学, 19, 1224 - 1239 .
- 21) 西園昌久 (1983 a) : 対人恐怖と手首自傷 - 性同一性障害としての理解 - . 清水将之ほか編, 青年の精神病理3 弘文堂, 201 - 232 .
- 22) 西園昌久 (1983 b) : 現代青年期論 . 西園昌久編, 青年期の精神病理と治療 . 金剛出版, 15

- 30 .
- 23) 岡田 努 (1988) : 学生相談からみた現代青年の特徴 . 文教大学保健センター年報 , 8 , 24 - 26 .
- 24) 岡田 努 (1993) : 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 . 発達心理学研究 , 4 , 162 - 170 .
- 25) 大橋秀夫 (1988) : 対人恐怖 . 土居健郎編 , 異常心理学講座 5 神経症と精神病 2 みすず書房 , 1 - 72 .
- 26) 菅原健介・山本真理子・松井 豊 (1986) : Self-Consciousness の人口統計学的特徴 . 日本心理学会第50回大会発表論文集 , 658 .
- 27) 鈴木知準 (1985) : 対人恐怖症の経過・予後 . 高橋徹編 , 精神科 Mook No.12 対人恐怖症 . 金原出版 , 183 - 197 .
- 28) 鈴木淑元 (1991) : 現代の青年期における性差について . 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 , 31 , 99 - 105 .
- 29) 高橋 徹 (1976) : 対人恐怖 - 相互伝達の分析 - . 医学書院 .
- 30) 滝沢三千代 (1994) : 思春期・青年期の発達心理 . 伊藤隆二ほか編 , 人間の発達と臨床心理学 4 思春期・青年期の臨床心理学 . 駿河台出版会 , 1 - 38 .
- 31) 津留 宏 (1981) : 高校生の心理 - 高校時代をどう生きる - . 大日本図書 .
- 32) 内沼幸雄 (1977) : 対人恐怖の人間学 . 弘文堂 .
- 33) 内沼幸雄 (1990) : 対人恐怖 . 講談社現代新書 .
- 34) 山田和夫 (1989) : 境界例の周辺 - サブクリニカルな問題性格群 - . 季刊精神療法 , 15 , 350 - 360 .
- 35) 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987) : 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報) - ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 - . 安田生命社会事業団研究助成論文集 , 23 , 206 - 215 .
- 36) 山下 格 (1977) : 対人恐怖 . 金原出版 .

資 料

質問紙「対人恐怖心性尺度」

(1 ページ目)

ここには、さまざまな悩みや不満が書かれています。ここに書かれていることがらをよく読んで、それが自分に、「あてはまる」か「あてはまらない」か、その程度を 印で記入してください。あまり考えすぎるとわからなくなることがあります。自分にあてはまるかどうか、読んですぐ、どんどん記入して行ってください。

記入のしかたは、

たとえば、1) 体の調子について心配している。

という項目について、「ややあてはまる」場合、下のように4に 印をつけます。

全	あ	や	ど	や	あ	非
然	て	や	ち	や	て	常
あ	は	あ	ら	あ	は	に
て	ま	て	と	て	ま	あ
は	ら	は	も	は	る	て
ま	な	ま	い	ま		は
ら	い	ら	え	ら		ま
な		な	ない	な		る
い		い		い		

1) 体の調子について心配している。..... 0 - 1 - 2 - 3 - ④ - 5 - 6

(2 ページ目)

全	あ	や	ど	や	あ	非
然	て	や	ち	や	て	常
あ	は	あ	ら	あ	は	に
て	ま	て	と	て	ま	あ
は	ら	は	も	は	る	て
ま	な	ま	い	ま		は
ら	い	ら	え	ら		ま
な		い	ない	な		る
い		い		い		

1) 他人が自分をどのように思っているのかとても

不安になる。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

2) 集団のなかに溶けこめない。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

3) 人前に出るとオドオドしてしまう。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

4) 人と目を合わせていられない。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

5) ひとつのことに集中できない。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

6) 生きていることに価値を見いだせない。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

7) 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考

てしまう。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

8) グループでのつき合いが苦手である。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

9) 会議などの発言が困難である。..... 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

- 10) 人の目を見るのがとてもつらい。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 11) 根気がなく、何ごとも長続きしない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 12) 充実して生きている感じがしない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 13) 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 14) 仲間のなかに溶けこめない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 15) 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 16) 人と話をするとき、目をどこにもっていったい
いかわからない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 17) 計画を立てても実行がともなわない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 18) いつも疲れているような感じがする。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 19) 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 20) 人との交際が苦手である。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 21) 大ぜいの人の中で向かい合って話すのが苦手である。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 22) 顔をジューッと見られるのがつらい。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 23) 意志が弱い。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 24) いつも頭が重い。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 25) 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 26) 人が大ぜいいると、うまく会話のなかに入っていけない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 27) 引っ込みじあんである。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 28) 向かい合って仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 29) すぐに気持ちがくじける。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 30) 何をやってもうまくいかない。 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
- 注1 . 尺度 <自分や他人が気になる> 悩みの得点は、項目 1 ,7 ,13 ,19 ,25の合計値
 尺度 <集団に溶け込めない> 悩みの得点は、項目 2 ,8 ,14 ,20 ,26の合計値
 尺度 <社会的場面で当惑する> 悩みの得点は、項目 3 ,9 ,15 ,21 ,27の合計値
 尺度 <目が気になる> 悩みの得点は、項目 4 ,10 ,16 ,22 ,28の合計値
 尺度 <自分を統制できない> 悩みの得点は、項目 5 ,11 ,17 ,23 ,29の合計値
 尺度 <生きることに疲れている> 悩みの得点は、項目 6 ,12 ,18 ,24 ,30の合計値

注2 . 本尺度の作成経緯については、文献 6) と 8) を参照のこと。

Summary

Toshiaki HORII :

Developmental Changes of Negative Self-awareness in Interpersonal Relationships during Adolescence (Second Report)

This paper is the second report of the research regarding developmental changes of negative self-awareness in interpersonal relationships during adolescence. “The inventory of negative self-awareness in interpersonal relationships” was given to 363 junior high school students, 347 high school students and 419 university students. With the result of statistical analyses, negative self-awareness in interpersonal relationships was high generally in high school students. Regarding university students, it was in generally low tendency. But, when associating with the group, the fear feeling which it occurs regarding university students was in high tendency. Psychological causes of these developmental changes were considered.

(Health Administration Center)